

渋谷虎雄博士著『中世萬葉集研究』

河野 頼 人

渋谷虎雄博士には、さきに『古文献所収万葉和歌索引』（昭和38年4月）という御著作がある。「思えば長い二十年であった」と「はじめに」の冒頭の一句に示された博士の感慨が、実感をもって迫ってくる、そんな御著書であった。

中古・中世の勅撰集・私家集・歌論書・連歌論書・歌合判詞・物語及びその注釈書、その他約二百八十余にみられる「萬葉歌及び萬葉語句の所在索引」（凡例）をまとめられたものである。典拠となっている文献は、「なるべく一般通行の印行書」によることを原則とするが、「そのないものは、板本・写本に拠り」、「また諸本間に異なるものは」、「それらにも当」（凡例）るといふ周到な用意がほどこされているのである。

そして私たちは本索引を利用して、萬葉の歌が後世の歌書類にどういう形で引用されているかという事から、萬葉の歌の訓み方を定める参考にすると共に、歌風の時代につれて変遷する姿をも知ることが出来るのである。本索引が、『校本萬葉集』『萬葉集総索引』とならぶ学者必備の書として高い価値を持つものであることは、私などが今更いふまでもないことであらう。

そして、又ここに、二十数年の歳月を背負って、『中世萬葉集研

究』と題する大著を公刊された。

本書の原題は「中世歌書所収の萬葉歌に関する研究」の由であるが（はしがき）、博士は、萬葉集研究のうち、萬葉研究史の研究は未開拓の領野というべく、とりわけ中世のものは甚だしく立ち遅れている。のみならず、あらゆる中古・中世の文献にあたってそこにあらわれた萬葉歌の個々の性質意義を明らかにするという徹底的調査については、行きとどいていない。「そしてとくに、それが現代の萬葉研究に校勘資料として何ほどの価値を持ち、何を与えるかについての研究にいたっては、まったく無いに等しい」（12ペ）「ただたんに中世における萬葉集の研究はかくかくであったでは、意義がないとは云えぬとしても、それでは不十分であって、これが訓詁注釈的研究につながり、これに資するものとなって、初めて現在に意義を持つ研究ともなりうる」（5〜6ペ）といわれている。

そしてこの研究に必要な作業の一つは、中古・中世のあらゆる文献に当って及ぶ限りの萬葉歌を収集整理する。これは前記索引の成果になつているといえる。二つは、更にその性質意義等の徹底的研究であるとされる。そして本書において、その結果が示されているのである。すなわち、索引の業績と表裏一体をなすものといえる

のである。

こうして索引に引き継ぐものとして待望された本書は、「中世こそ、万葉に近く、万葉集を研究する意欲が見られて、何か興味あるものを胎んでいるように考えられる」(15ペ)ことから中世に焦点をあわせ、第一部は研究篇として、先ず序説をおき、

第一編 歌論書に見える萬葉歌の研究

第一章 古来風体抄 第二章 色葉和雜集

第二編 勅撰和歌集中の萬葉歌の研究

第三章 新勅撰和歌集 第四章 玉葉和歌集 第五章 風

雅和歌集

第三編 萬葉集抄出本の研究

第六章 萬葉抄出 第七章 萬物部類倭歌抄 (付) 堀川院

百首和歌

第四編 類題歌集中の萬葉歌研究

第八章 萬葉一葉抄 第九章 勅撰名所和歌抄

そして結語と、整然たる構成を持ち、第二部は資料篇として、宮内庁書陵部本を底本とし、それに静嘉堂本・お茶の水図書館本・京都大学図書館本と大久保正氏蔵の伝三条西実隆白筆本をもって校合した「校本萬葉一葉抄」の全文翻刻を併せ収めてある(第一部四九三頁、第二部四二二三頁。そして引用の萬葉語句索引三五頁等がある)。第一部の諸書は、「それぞれ同じ歌書であっても性質を異にし、また別々のジャンルに属して、なおかつ未開拓の領野であり、しかも中世的なものを代表する」(17ペ)ものとして本書には選ばれたのである。

さて、第一章「古来風体抄」について、初撰本を底本として所収

の万葉歌百九十一首を考察され、万葉原文のままのものも多いが、それは原文のしっかりとした、「現存の類聚古集に親近関係のもので、しかもその原文をかなり忠実に訓もうとした後のある、おそろく平安末に近い頃に存在していた由緒ある本」——それは元暦本・金沢本よりもすぐれた本文を持つもの——に拠って倣成は成したと考えられ、風体抄の「万葉歌は「古来風体抄本萬葉集」として、……萬葉研究のための校勘資料と充分になりうる、価値ある一本」(57ペ)であることを論証されたのである。

例えば、巻四の五六〇の「孤悲死牟、時者何為牟、……」の「時者」は元、桂、神にみえるもので、仙覚本になって「後者」に改められたのであるが、意味の上からも、現代諸家も多く「時者」に従うのであるが、この原文が風体抄にみられることが注意されるとされ、又、巻四の七三七の「……若狭道乃、後毛将念吾」の第五句は萬葉古写本・風体抄の再撰本はすべて「後毛将念君」とあり、「念は合の誤」(代初、童)、「念は会の誤」(考)等の誤字説があるが、これをまつまでもなく、風体抄の原文を典拠として現存本は改められるのではないかと説かれた。

訓についても、巻十の二三三三「ふるゆきのそらにけぬべくこふれどもあふよしなく、つきぞへぬらし」の第四句、原文「相依無」とあって訓みに諸説あるのであるが、この風体抄の訓みが、「アフヨシナニ」(佐佐木信綱・岩波大系・伊藤博)とともに、一考すべき価値ある訓として発掘しておられること等、その論証の妥当さによって従うことが出来るのである。

そしてこれらは、徹底的な風体抄の諸本研究の上に立つてなされているのであるから、「校本万葉集」に加えるものとして安心して

よることが出来るのである。

ところで例えば、卷十一の二四八〇の「……人みなしりぬわがこひづまを」と(童・岩・ル)

「の「を」は孤立した訓であるが、これを「古くこの訓みの伝存していた一証左として残せるのではあるまいか」(47ペ)とされたのには、今少し説明がほしいように思う。すぐこの後で説かれて例のように、「と」と「を」の字体の類似による誤字の結果か、平安期に行われていた訓みの一つとみることか或いは出来るのではあるまいか。

猶、博士は、『校本萬葉集』に従って「現存『紀州本』ともいう」と注記の上ではあるが、「神田本万葉集」の名称で通しておられる。これは「紀州本」の方が妥当であるかとも思う(佐佐木信綱『萬葉集の研究第二』)。

第二章「色葉和難集」であるが、問題のある成立年時・著者に就いて、万葉歌それ自身から「確とした仙覚以後の訓と認めらるべきものは考え難」(83ペ)く、「仙覚以前——定家の萬葉抄出ごろまで——の時に、その頃の人——六条家関係の——によって作られた」(98ペ)ものであること、その万葉歌は袖中抄・俊頼口伝・奥義抄・五代集歌枕等を参看しながら作成されたと考えられ、和難集の萬葉歌が持つ史的価値はさして認め難いとの位置を与えられた。

そして、中世の歌論書が価値ある資料を現在に残し、今後の万葉研究に資しうるものがある一方に、「先行歌論書あたりとなほほどかの関係があって、その先行歌論書との関係の基礎的調査の上に立つて、はじめて研究が可能になるというものもある」(95ペ)と指摘されているのであるが、後学の示唆されるところ大きいのである。

次に勅撰和歌集中の萬葉歌の研究に入って、第三章「新勅撰和歌集」においては、その萬葉歌は現存萬葉古写本にはなく、大体神田本に近く——仙覚寛元本の類の——しかも平安歌語の慣用の訓みをも内包するものに拠っているかと考えられ、又入麿の歌は、直接萬葉集に拠るというよりも歌仙本系などの柿本集に拠っている。おそらく二種類の本に拠ったと考えられているのである。

そして校勘資料としての価値を、一例をあげれば、卷十一の二五八八「夕さればきみきまさんと……」。萬葉原文は「公来座跡」であるが、考が「キミキマサムト」として以来定訓となっているものであるが、新勅撰集にはかく既にみえ、そして柿本集にも一致している。「すなわち現存以外の古写本にこの訓のあったことが、この定家によって証明され、校本萬葉集にこの訓を増補」(45ペ)することが出来ると説かれているのである。

つづいて「玉葉和歌集」「風雅和歌集」の章は、風体抄とともにもっとも力を注いだといわれるように、充実した文章である。第四章「玉葉和歌集」からみていくと、その万葉歌八十一首は、為兼の京極風の実徳を証明する資料としてはまことに格好なものであるが、為兼の拠った本は現存しない「古次点頃のみあまり原文にかかわることなく、中世歌語の慣用に従って訓まれたもので、しかもそれは異本柿本集・五代集歌枕などもほぼ系統を同じくするものである。たとえばある種の「仮名万葉」のようなもの」(83ペ)であって、校勘資料としての価値はとぼしいといわねばならない。しかし、平安朝の仮名本万葉集の実徳をいくらかは明らかに出来るのであるといわれている。

第五章「風雅和歌集」については、常に玉葉集を参考として編纂

しているのであるが、風雅集の万葉歌の所拠本としては、類聚古集とはいえないが、比較的それに近いもの、しかもその訓は古次点系。その上萬葉原文にあまりかわることなく、かなりくだけたもの、そして玉葉集と同じく仮名本万葉集によったか(219x)と考えられ、そして六条家の人々が拠った本とは近い関係にあった(223x)。かつ面白いことに、万葉集のこの巻の一首あの巻の一首と飛び飛びに拾ってひとつづきになっているものが多く、ここに博士は、仮名本の類でも、「赤人集・人麿集・家持集などのようなものとは異なり、類聚古集に近く、部類されたもの」(224x)であり、かなづかいもかなり正しい、由緒ある一本のおもかげを伝え、その所収歌は五十一首に過ぎないのだが、貴重な訓のあることを発掘されたのである。

一例を示せば、巻十の一八七二の「見渡せば春日の野べに霞たちひらくる花はさくらばなかも」。傍線部分萬葉原文「開艶者」。諸本すべて「サキニホヘルハ」。家持集「さきみだれるは」。ただ赤人集のみが風雅集と同訓である。さて「開」を「ヒラク」と訓む例は萬葉集中に多いのであるが、「艶」を「ハナ」と訓む例はない。ところが赤人集と風雅集は「花」とある。そこで、「『艶』を『開(はな)』と誤って訓んだものか、そのような文字面の木があったのか、疑えぬでもない。すでに和名抄にも『韻言巴波奈比良』とみえている。すると、この本文または一訓が古くあったとも考えられないでもあるまい」(225x)と推論されたのである。

そして本書の結語に説かれた、「勅撰集中の万葉歌は、たとえ、萬葉原文がなくて仮名書きのために、やや研究上の資料的価値は劣るとはいえ、……簡単につまらないもの、誤ったものと片付け得る

かどうか」(492x)という力強い言を生むまでの着実に歩みつけて来られた博士の道程をしみじみと思ったことである。これが学問の年輪というものであろうか。

次に第三編では万葉歌の抄出本について考察されている。第六章「萬葉抄出」、第七章「萬物部類倭歌抄」とそれぞれ定家関係のものである。前者、『校本萬葉集』にあるが研究らしいものがない文獻。これについて、「萬葉抄出の拠った本は、いわゆる西本願寺本なる文永三年本の類ではなく、……親行本ないしはその祖本の類」(227x)で、「これはもしや現存しない神田本の類かもしれない」とされている。現存の巻十一以下は大体において仙覚文永三年本に同じものであるが、巻十までと同系統の姿を推測させるものがあるとするれば、貴重な一本というべく、すぐれた校勘の一資料ということが出来ると思うのである。

後者については、その所拠本は類聚古集に近いもの、もしや風体抄の拠った一本と同じではあるまいかと考えられるもので、仙覚本とは異なる系統のものであることを明らかにされた。

そしてこの編において注意されることは、定家はすくなくとも二つの萬葉集を所持しており、一つは俊成相伝の、類聚古集に近い本文を持つ一本、これによって萬物部類抄を選び、他の一つは、仙覚本の祖本或いは現存本以外の古い神田本の類のもの、これによって万葉抄出と新勅撰集を選んだ。そして、前者の本を建暦三年十一月二十三日、源実朝に贈ったのではあるまいかとされたこと(いわゆる鎌倉右大臣家本といわれるものか)。そして、この萬物部類抄の萬葉歌句は、一部分ながらでも、その由緒ある古本の姿を今に伝えるものとしてされたことであろう。

実朝が字んだ万葉調の典拠については、類聚された万葉集であるというのがほぼ通説であるが、実朝贈与本万葉集については一応の問題提起とはいっておられるものの、定家本金槐集の後における贈与本万葉集との関係等、今後いろいろ発展していくべき問題ではなからうか。

猶、この編においては次の言を引用しておこう。「定家の万葉集に関する業績は、これまでまっく顧慮されていなかったが、まことに目を見はるものがあり、これら数書は、今後の萬葉研究に必要かくべからざるものであることが知られる」(493頁)

第八章「萬葉一葉抄」は、かつて大久保正氏が「三条西実隆の著述であることを、その自筆本の発見によって証明されたのであったが(「萬葉」昭和29年1月)、博士は、その書誌、諸本の異同を精査され、そして一葉抄が大量の萬葉歌を有し、本文は仙覚元永本と寛元本との両方の性格を持っているものであって、かつ貴重なことは、今は知ることの出来ない寛元本の訓みと思われるものが随所に元永本と同居する貴重なものと述べられたことである。一葉抄は本章や資料篇の校本の全文翻刻によって、今後より一層研究は広くなり、深化していくことであろう。

第九章「勅撰名所和歌抄」の万葉歌の典拠は勅撰集とは考え難く、五代集歌枕によってそのかなりの部分を構成していることを発見され、五代集歌枕の現存本は下巻しか信抛出来るものがなく、その上巻をこの名所和歌抄で補訂することが出来、五代集歌枕の研究に対校の一つの資料ともなりうるものであることを述べられたのである。

以上読み誤りをおそれつつも、つたない筆で本書の概要を紹介し

て来たのであるが、第九章は結果としては別として、未開拓の領野に鋳をうちこまれ、それぞれ一筋に所期の意図を追求され、その性質意義を明らかにされて来たのであり、私たちは安心してその所論に拠ることが出来るのである。風体抄の章において、その研究の先蹤たる宮本喜一郎氏「古来風体抄に抄出せられた萬葉集」(「国語国文」昭和17年10月)について、「古来風体抄諸本、とくに初撰本等の本文が参照されていないため、不十分におわっている」(39頁)といわれていることは、博士の方法を語ることばでもあると思うのであるが、各章には必ず諸本(或いは伝本・書誌等)の項があるように徹底した文献調査という豊かな地盤に立って、事実をもって語らせるといふ着実な方法を精神とされ終始一貫された本書には、長い歲月がある。博士の一步は一步と築きあげて来られた努力と真摯さは、私ども後学にとって尊い指針といふべく、「本研究も今年ではや二十数年を数え」(はしがき)という感慨もさきの索引のそのの響きにも似て、余所事なく迫って来るのである。

学問の年輪が育てあげて来た鬱然と茂る逞しい二本目の大樹——さきの索引の一本とともに、今後の萬葉研究に大きな蔭をもたらし、資するところ大なるものがあるということが出来るであろう。

猶心覚えまでに、気のついた誤植等の中から内容に関係あるかと思われるものをあげておく。数字は頁・行数の順。

「加茂真淵」は「賀茂」が正しいといふべきであろう(4の4、8の6)。「人麻呂歌集と人麻呂伝」とする。「の」はとる(10の6)。「参着」は「参看」(99の1)。為兼抄の「芸暗もなく」は日本歌学大系の用字ではあるが「藝暗」ではあるまいか(154の8)。「さきにけしも」は「さきにけらしも」ではなからうか(177の

12)。「出でこし今日暮れずもあらぬか」の「今日」と「暮れ」の間の空白一字分はつめた方が本文を誤らせずによいと思う(180の1)。216頁の表の「人麿作家」は「作歌」。「元暦本はさがってやち」は「ややさがって」(217の6)。「かりぞ鳴く」は「鳴く」。そしてVでとじる(218の7・8)。

227頁で、「巻二・十七・十九・二十では、玉葉集は少ないか、まったく無いのに、風雅集は逆になりに多く見られる」とあるのであるが、巻十七・巻十九については説明がほしいと思う。特に巻十九は、巻五と同じく三に対する二である。

225頁の表と、125頁の表の相関々係はいかがであろうか。例えば元暦本の「スミヨシ」の例が、125頁では十四例であるがここでは十六例と違っている。この違いについては説明がほしいと思う。

294頁の表の「ワキコモ」は「ワキモロ」。「船星」は、間をあける。「船」と「星」の意であろう(317の中段21)。「あをやま」の「き」は「を」の傍書ではなからうか(335の13)。「山佐国葛」の「国」は不審。「奈」ではなからうか(351の17)。

333頁の表の部類抄の本文の項にかかけられた「衣乾有」は「ころもほじたる」でなければならぬと思つた。

356頁の表の「一致する万葉古写本」は「一致しない……」ではなからうか。

「実朝贈写本」は「実朝贈写本」(338の5)。「カサハヤノ」の傍点の位置が不分明(391の7)。「わかたもとかむとおもほむ……」には「まかむ」と「ま」が脱字ではなからうか(395の11)。「代匠記初稿本タモキタルシ」は「……クモキタルシ」である(407の9)。傍点が一文字ずつ下っている(415の3)。「ともかくの」は「ともか

くこの」(415の12)。「弧訓」は「弧訓」(417の10)。「織黄葉余」は「……余」(417の10)。

425頁の表Iと426頁の表IIの「名所抄との共通萬葉歌」の書式が逆になっている。464頁の表の下段の「ほととぎす」は「ほととぎす」。「ちぬらくは玉のをはり……」は「玉のをはかり」で脱字があるか(466の16)。「そのからみか」は「そのからかみ」ではなからうか(481の5)。

486頁の「くるすの」の証歌としての万葉番号「九七三」は不審。証歌にはならないと思うのであるが、誤植であろうか。

(昭和四十二年四月十五日刊 A5判 九七〇頁 七五、〇〇頁 風間書房)

— 北九州大学文学部助教 教授 —